

## 令和8年度 議会地域懇談会（蘇原地区）

令和8年6月9日（火） 蘇原ふれあいセンター

参加人数 45名

テーマ「これから蘇原地区をどうする」「今、自分が思うこと」

### テーブルごとの意見まとめ

#### ■ 1 番テーブル（伊佐治副議長）

後山自治会をはじめ、夫婦のみの高齢者世帯が増えており、今後の自治会運営や日常生活への不安が共有されました。蘇原地区は三つの地域に分かれているため、黒川・佐見地区のような一体感や伝統芸能が育ちにくいとの意見があった一方で、それぞれの地域単位では団結力があるという意見もありました。今後は三協議会の一本化や役職の整理など、地域運営を見直す必要性が話し合われました。また、世代ごとの価値観を尊重しつつ、変革期に合った柔軟な地域運営を進めたいとの意見や、小中一貫校への移行を機に、子どもと地域との関わり方も改めて考えていく必要があるという意見が出ました。

#### ■ 2 番テーブル（野尻議員）

人口減少や高齢化、空き家の増加により、地域の助け合いや自治会運営が難しくなっている現状が共有されました。若者にとって魅力あるまちづくりや、働く場所・企業の確保が必要との意見がありました。また、リニア開通を見据え、切井地区を「東濃の玄関口」として位置づけ、自然や景観、食、文化イベントを活かしたまちづくりを進める提案が出されました。二拠点生活、山村留学、廃校を活用した特色ある施設づくりなど、交流人口を増やすための具体的なアイデアも多く挙がりました。

#### ■ 3 番テーブル（杉山議員）

子どもや住民が集まる機会の少なさを課題とし、三川・切井などが個別に行う祭りを蘇原全体で協力して開催することや、ビアガーデンのような小さく楽しい取組から始める案がありました。空き家や竹林、古い施設を地域で見直し、紅葉や桜を活かした景観づくり、伐採した竹の堆肥化など、景観と実益を両立させたいとの意見もありました。体験型観光を通じ、地域の日常そのものを魅力として関係人口を増やす可能性が示されました。持続可能な地域づくりには、住民が諦めず、気負わず参加できる雰囲気を育てることも大切であるとされました。

#### ■ 4 番テーブル（三戸議員）

地域の役を減らすため、蘇原地区を一つにまとめたいという意見がある一方、切井の奥と三川の下では環境や考え方に違いがあり、一本化の難しさも指摘されました。また、営農組織の集約や茶業の将来、鹿対策の必要性など、農業をめぐる課題も共有されました。提案としては、民泊・農泊や飲食店の誘致、イベントによる魅力発信、廃校の活用を進めるほか、子ども食堂を、世代を超えた交流の場にする案もありました。また、移住者や地域おこし協力隊とも連携して「白川うどん」復活に挑戦したいとの提案がありました。

#### ■ 5 番テーブル（佐伯議員）

蘇原小学校の閉校や若者流出、農地・山林の荒廃、祭りの担い手不足などへの懸念が示されました。旧小学校をサウナ付きキャンプ場、水耕栽培やイチゴ栽培の拠点として活用する案や、閉校を花火やキッチンカーを交えたイベントにし、新たな節目として盛り上げる提案もありました。空き家改修による住まいづくり、民泊ツアー、オンラインゲームなど趣味を通じた交流、川沿いの景観を生かす取組を組み合わせ、外から人を呼び込む地域づくりが期待されました。

#### ■ 6 番テーブル（梅田議員）

蘇原地区は恵那インターに近く、将来的なりニア開通によるアクセス向上も期待できることから、町の成長戦略の中で重要な地域として位置づけるべきとの意見が出されました。企業誘致、移住促進、川沿いの景観を活かした観光など、攻めの地域戦略を求める声が多くありました。遊休農地には企業の農業参入や営農組合化、高収益作物の導入を進め、高齢者も施設管理や地域活動の担い手として活躍できる仕組みをつくる案が示されました。空き家や蘇原小学校は、移住者向け住宅、サマーキャンプ、企業社宅、地域交流拠点などに活用し、地域の資源を眠らせず、新たな仕事や交流につなげたいとの提案がありました。

#### ■ 7 番テーブル（藤井議員）

空き家対策を中心に、移住者の受け入れや交流人口の拡大について話し合われました。人口減少に伴い空き家は今後さらに増える見込みであり、空き家になる前から地域で情報を把握し、サポートセンターへの登録につなげる必要があるとの意見がありました。切井の杵振り踊りや赤河の元旦マラソンなど、地域行事には町外や他地区からの参加もあり、交流人口拡大の可能性が再認識されました。また、黒川地区の民泊の事例を参考に、民泊視察ツアーなどを通じて地域住民の理解を深める提案も出されました。

## ■ 8 番テーブル（田口議長）

白川町は限界集落とも言われる状況にある一方で、静かで穏やかな暮らしを望む高齢者もあり、現状をどう受け止めるかが話題となりました。地域の中心となる 30 代・40 代の声を把握する必要性や、若い世代が「この町に住み続けてよかった」と思える支援の重要性が指摘されました。また、朴葉寿司づくりや各地域の祭り、杵振り踊りなど、地域のつながりを生む活動が残っていることも確認されました。教育では、地域に根ざした学びや地域産業に触れる機会を設け、将来白川町で就職・生活したいと思える環境づくりが必要との意見がありました。

## 蘇原地区のまとめ・特性

蘇原地区では、人口減少や高齢化、子どもの減少、空き家や農地・山林の管理、地域役員の担い手不足など、地域の持続に関わる課題が幅広く共有されました。特に、切井・赤河・三川の三地域に分かれていることによる一体感の弱さや、自治協議会・自治会の運営負担をどう見直すかが大きなテーマとなりました。

一方で、恵那方面へのアクセスの良さ、将来的なりニア開通、川沿いの景観、農業・食・祭り・伝統芸能、民泊や農泊など、蘇原地区ならではの強みを活かした前向きな提案も多く出されました。廃校や空き家の活用、企業誘致、交流人口の拡大、子どもや若い世代が地域と関われる仕組みづくりなど、守りに入るのではなく、地域資源を活かして新しい可能性を探る議論が行われました。